

令和5年度県民生活審議会 第1回県民躍動部会

1. 日 時 令和5年11月14日（火）14：00～15：40
2. 場 所 兵庫県庁2号館5階庁議室
3. 出席者 委 員：田端会長、赤澤部会長、上田委員、田林委員、富田委員、馬袋委員、福田委員、本田委員、松本委員
事務局：竹谷県民生活部次長、佐藤県民躍動課長、秋山県民躍動課副課長兼参画協働班長 他

4. 議事内容

- (1) 報告事項「令和4年度参画と協働の関連施策の年次報告」
(2) 協議事項「『躍動する兵庫』に向けた地域づくり活動のあり方について」

5. 主な内容

- (1) 報告事項「参画と協働の関連施策の年次報告」について

【アウトカムの視点の必要性】

- ・ 多岐にわたる施策を展開されており、いろんな場面で、県民の活動をバックアップされていることは伝わる。ただ、この報告に限らず行政一般にいえることだが、単なる施策の羅列になっている側面が強い気がする。
それらの施策が、どういう目的、意義、意味合いを持ったものなのか、どこに向けた施策なのかということをしかりと突き詰めることが必要。
例えば、地域づくり活動支援施策の中でも、①の情報提供・相談体制整備。これは確実にやった方がいい施策だと思うが、では誰に対して、どんな情報を伝えることで、どういう効果を生むことを意図しているのかというアウトカムの視点、誰がどのような状態になることを目指して、この施策を組み立てているのかという視点で見えていかないと、その施策の善し悪しが議論できない。

【地域づくり活動支援指針と県行政への参画協働推進計画の関係性】

- ・ 条例では、地域づくりの活動支援と、県行政参画・協働推進というのは、並列のような形で書かれている。たしかにこれらが全く別物とは思わないが、基本的には異なることを捉えたもののように感じる。
- ・ 社会の多様化に伴い、どう行政の活動とのギャップを埋めるかという議論をしていく中で、この地域づくり活動を、行政がどうバックアップできるかという視点で議論を深めることが大事。そういった位置づけの中で、県の施策があって、その県の施策にどう県民の意見を反映させていくかというのが、県行政への参画という議論だと思う。今の地域社会にはどういう課題があって、そこへどうアプローチしていけばいいのかということ議論する中で、県の施策はどういうあり方がいいのかという順番で考えた方が、広がりが出るのでは。

【事業評価につながる関連データの表示】

- ・ 所々関連データとして、今の状況を示す指標に当たるようなものが記載されている。これがアウトカムのようなもので、「こういう事業をした」、「その結果、このデータがこう伸びている」という状況を目指そうとされているために、こういった関連データが表示されているのだろうと思う。関連データの表示について変更してほしいという話ではないが、実際この取り組みをしたことによって、この関連データがどう伸びているのかということの方が分かれば、より事業効果がわかりやすい。
- ・ また、資料を変更する必要はないが、兵庫は「五国」と言われ、それぞれ地域性が異なる中で、その関連データをクロス分析をしたときに、どういう違いが生じているのか。この地域はこう伸びているが、こっこの地域はそんなに伸びていない、ということがもう少しわかれば、いろいろと考えていく材料になるのではないかと思う。

【Will・Can・Must を踏まえた施策の整理】

- ・ どんなターゲットのどんな満足度・幸福度を上げるための施策なのかということ意識することも大事。社会の幸福度や満足度は、やりたいこと「Will」、できること「Can」、やるべきこと「Must」の3つの要素でできているということがよく言われる。本日後半の議論の根底となる「躍動する」とは何かということころにも繋がるが、Will、すなわち「やりたいことだけをやっていること」が満足度に繋がるのか、それともやるべきことを合わせてやって、地域をよくすることが幸せや満足度に繋がるのかというふうな、ターゲットとか、バランスみたいなところにも関係するように思う。

(2) 協議事項「躍動する兵庫」に向けた地域づくり活動のあり方について

【「地域課題の解決」が「県民躍動」なのか】

(委員)

- ・ 市町との連携も大きなテーマになってくると思うが、県民躍動の理想として資料に記載の「生き生きした暮らしが体現でき、やりたいことが実現できる」ということを、どうやって広げていくか考えるにあたって、「ギャップ解消・地域課題解決が、県民躍動になる」というところに非常に違和感がある。この「ギャップを埋める」とはどのようなイメージなのか。それが県民躍動とどう繋がっているのかという部分についてももう少し事務局のイメージを教えてください。

(事務局)

- ・ 資料32ページのイメージ図では、個人を取り巻く状況・社会の状況が以前に比べ変わっており、地域の課題や、個人個人が対応していくべきことが、量あるいは質の面で、増えているのではないかという事務局の問題意識を表現している。「現在」の地域ニーズを一番外の枠で示しているが、行政・NPO・自治会等において、きめ細かに対応できていない範囲が、以前より増えているのではない

かと考えている。このギャップ（図中の白抜きの部分）を埋めることが、困っている人を少なくすることにつながり、ギャップをなくすことで、地域の課題が解決し、例えば介護の問題や個人の様々な課題等も解決して、その結果、みんながやりたいことに挑戦できるような社会に繋がっていくのではないかと考えている。

（委員）

- ・ 市民・県民が主体的に地域課題に関わる中で、結果的にギャップが埋まっていくというイメージなら分かるが、県民一人ひとりがそこを埋めていくような取り組みたいなことを実現していくということか。

（事務局）

- ・ これまでから参画と協働の観点で、県民が主体的に社会貢献に取り組んできた。いろんなNPOが独自に取り組まれていたり、あるいは、県と一緒にあって、主体的にその地域の課題を発見して、それに対応してきていただいていた。今後さらに人口が減少し、NPOや地域活動に従事する人も減っていく中で、地域づくり活動をもっと活性化し、いろんな分野でそういう活動が増えれば、みんながやりたいことができ、県民が躍動する兵庫県になっていくのではないかとイメージ。

【ギャップの姿と対応範囲の検討】

- ・ 現在のギャップの姿はこう（P32 図）ではない気がしている。行政・NPO・自治会もしくてもいいことがあるのではないか。他にも、ただ拡大しているのではなく、もっと（図示されている）課題の円が細く長く広がっているイメージな気がする。

人口は減っているが、やりたいことは増えている中で、そういった細かいニーズを全部埋めるのは無理だと思う。例えばまちづくりでも、最低限絶対にやらないといけないことは安全安心と情報共有に集約されており、あとはやりたい人がやるという形で整理されている部分もある。

そこをどうマッチングさせるかという、新しい協働のあり方が求められている気がするし、先ほど言われた疑問点はその辺りじゃないかと思う。拡大する課題に対して、対応も広げていくことが果たして本当に正解なのだろうかと思う。

- ・ 私もギャップのところが気になっている。32 ページに「地域課題の複雑化・多様化」とあるが、昔と比べて、本当に複雑化・多様化しているのだろうか。個人的にはそう見えているだけなんじゃないかというのが1つ思うところ。
- ・ これは私の仮説だが、もともとみんな様々な価値観で生きていたはずで、もしかすると、以前からもっと多様でもっと複雑だったけれども、例えば県や相談を受けるような団体には、今までは届かなかった、届けようがなかった、そんな声が、デジタルツールやSNS等の普及により、聞こえるようになったのでは

ないか。どういう経緯と数字を経て、この「複雑化・多様化」という言葉が出てきたのか分からないが、もともとそうなのではないか。

そういった仮説の中で、今この時代に、それにどのように対応していくのか、あるいは対応しないと決めてしまうのか、どう小さな声をどこまで拾っていくのかとか。今だからこそ聞こえてしまうような、見えてしまうような、複雑化・多様化について、議論してもいいのではと思った。

- このような話は私もよく聞くところで、ニーズ全部に個別対応しないといけないのか、そうするとやることは増えていく一方だ。
行政は自分たちが何をすべきかという本質をきちんと整理し、その上で、自分たちでできないことをマッチングで、みんなで連携・共有してやるというシンプルな構成、骨をもう一度浮き上がらせるということも必要かもしれない。
- 最近では日本でも働き方、働く選択肢が増えて、引っ越し回数が多くなって、昔は平均3回だったのが、7回ぐらいになっている。アメリカでは11回か12回とのデータもある。つまり、人生の中で新しいコミュニティに入って、新しい友達を作って、新しい仕事に就いて、新しいところで遊ぶ、物を買う、消費するということが多く生まれており、これは大きな変化の1つだと思う。その変化にどう対応するかについては、今までの行政・NPO・自治会だけでできないことに誰が対応するのか、中間支援のあり方、外国人や、交流人口等も含めて、新しい力を育てるためにどうサポートするのかという課題がある気がしていて、行政の施策を改めて検討・点検していく上でも、1つの切り口になるんじゃないかと思う。

【多世代の繋がりの再構築と価値観の継承】

- 県民躍動とは何か、理想的な姿とはどういう状態なのかを考えると、反対に躍動していない状態とはどんな状況なのかを考えるのも1つのヒントになる。私自身は、個人や地域が断絶している状態、繋がりが切れて衰退していつている、動きがないような状態が躍動していない状態という印象を持っている。その関係性を紡ぎ直していくことが必要。そのために、自分としては、キーワードとして、「多世代の繋がりを育み直す」ということが大事なことだと思う。躍動がどんどん躍動を生んでいくようなスパイラル・好循環というか、活性化が次の活性化を生んでいくような、自分から自然と参画したくなる、心の琴線に響くような、活動・目的・社会的な価値をしっかりと見いだすことが大事だと思う。そういう意味では、親子の繋がり、多世代交流というのは、誰にとっても本質的なことだと思っている。例えば、最近各地で頑張っておられる子ども食堂。高齢の方がそこに関わって、地域の居場所として育てていくことが、いろんな世代の元気、地域のあり方にも繋がっていく。自治会を含め、地縁団体の担い手不足が問題になっている中、子どものことであれば若いお母さんもそこに参加して一緒に活動をし始める。そういう意味合いがあると思う。

これは、社会福祉だけじゃなくて、産業的な面、多世代の継業であったり、昔からある地場産業をどうしていくかであったり、そういうところが、本質的な価値に繋がっていくと思っており、いかにそういった部分の交流を育んでいくことで、単に人生の一局面のやりたいことをやるということではなく、長い目で見て、地域として蓄積されている価値を次につないでいくような、何かそういうのが、躍動に繋がるのではないかと思っている。

- ・ 私も祖母と住んでいたが、家族構成の変化、核家族化の進行によってそういう多世代での交流にハードルができていられるのかもしれない。地域単位で、世代を超えて、人生・地域の先輩から学ぶことができれば、新しいチャレンジもしやすくなるかもしれない。
- ・ 古いものもいいとか、新しいものもいいとかではなくて「合わさるからいい」という考え方をきちんと作って、施策を体系化していくことが重要ではないか。

【ゆるやかで柔軟な関係性の享受】

- ・ やりたいと思う人が、やりたいことをやりたいときだけやれる。コンビニ的というか、それぐらいの、すぐ関わって、すぐ違うことができるというふうな、そんな考え方があってもいい。
- ・ 宝塚市の自治会でいうと、1年未満の自治会長がほとんどであり、幅広い活動ができないという弊害がある。その一方で10年以上会長を務めているスーパーマン的な自治会長がいるところも何か所かある。そのあたりで差が広がっているという実態があるので、今後はスーパーマン的な人ではなく、すぐ参加できるけども自分の好きなことだけできるよってというようなチャンネルも作ってあげた方が、若い人は参加しやすい気がする。
- ・ 最近、映画も早送りで見るとような若い人が増えてきているというニュースを見たことがあるが、そういう人も関わられるような仕組みがあっても面白い。
- ・ 例えば、あれほど嫌がられているように見えたPTAを、一旦任意参加に戻し、運動会を手伝いたい人を募ってみたら、めちゃくちゃ集まったという話を聞いたことがある。だからこれはMustじゃなくて、WillとかCanだったんだ、やりたかったんだと。1回組織に入ってしまうと、これらを全部やれとなってしまう、それはしんどい。うまくマッチングというか、時代とか働き方に合わせて柔軟にやるという考え方が必要なのかもしれない。
- ・ これできないので助けてくださいっていうのが言いづらい社会になっている気がする。例えば、お年寄りも電球1つ替えることも厳しいが、電気屋さんに頼むと費用がかかる。ただ、近所のお兄ちゃんに頼めばやってくれるんじゃないかみたいなのところがある。何かそういう気軽に言えるような仕組みができると、お試しというか、ちょっと参加するみたいなこともできる。
- ・ 子ども食堂の話もあったが、子ども食堂で学習支援に関わっていた子たちは大

きくなるとボランティアとして帰ってきてくれる。種まきというか、小さな頃から、地域の中で自分が大切にされているという、自尊感情を育むような取組が必要であり、そういう活動を地道にしていけないと躍動に関心を持つ人すら育たない。

- ・ 子どもは、Will ばかりで、Can、Must が少ないが、大人が Will と Can と Must をやっているところをきちんと見て一緒にやるということが、将来、いろんなところに興味を持ってもらえるという可能性に繋がるかもしれない。

【対話から生まれる Will ・ Will から生まれる県民躍動】

- ・ 躍動する兵庫の理想的な姿について、この 15 ページの資料では朝来市のことも紹介をさせていただいており、だから共感するというわけではないが、とても共感するところがある。
- ・ 朝来市では、この Will を、もちろん地域の活動もそうだし、それから仕事であったりとか起業であったりとか、それぞれの「やりたい」をどう実現をしていくのかという考え方で、幅広く捉えている。その中で、冒頭話のあった、この Will・Can・Must が重なる場所というのは結構大切なポイントだと私自身は思うし、「対話」が重要なキーワードになってくるというのは、今までの仕事においても、地域の活動においても経験値としてある。
- ・ というのも、対話の中で、自分自身の Will が育まれていくこともあるし、地域の課題が見えてくること、職場や自分が直接できなくても、できる人と繋がりを得ることによって、実現が可能になることもある。その点では、ここに記載されている部分はすごく共感できる。
- ・ 32 ページの先ほどから議論になっているところは、私も若干の違和感がある。こういう課題があるから、その課題解決のためにという思考に陥りやすいというのは、仕事の中でもある。実際に地域の中で様々な活動が生まれていくプロセスにおいては、「こんなことが困っているから解決したい」という思考で物事が始まっていくことは多々ある。ただ、一方で、違う思考の整理があって、これは比較的若い方に多いが、「こんなことしたら面白いね」「こうなったら楽しいよな」という、私の中では「未来創造型思考」という表現をしているが、「こうなったら、まちがよくなる・楽しくなる」というような、ありがたい姿から活動が生まれていく思考をよく見受けている。それは年齢、価値観、役職などの違いによるものが影響していると感じる。例えば地域でいうと自治会長だとか、仕事の役職だとか、というような責任感による課題解決型思考と、そういったものがないフラットな若い方が、「もっとこうしたらまちが面白くなる」という理想像に向かって、動いていくことを考えると、この 32 ページの図については、地域課題の解決だけでなく、未来創造による県民躍動というものもあると思う。

【地域の実情に合わせた施策展開】

- ・ 兵庫は五国と言われるように非常に広く、地域によってかなり状況が違う。私

自身は宝塚市で活動しているため、阪神間の状況はなんとなく分かっているつもりだが、他の地域の状況は見えてない部分がある。地域ごとにどんな課題があるのかというところを我々の方でも確認できれば。

- ・ 個人的な意見だが、県全体で何かやろうと思うと、例えば、いろんなメニューを提示した上で、この地域は1・2・3をチョイスする、他の地域は3・5・6をチョイスするという形で、メニューをいろいろ組み合わせていくようなイメージで事業を展開した方が、その地域に合わせたことができると思う。
- ・ ただ、資料33ページにあるように、大きな意味で共通している部分はある。その辺りも考慮しつつ、各地域の実情に応じた担い手不足・人材育成をどうしていくのか、その辺りもあわせて議論できれば。
- ・ 県民生活に関する施策は、もちろん市町村といった基礎自治体はしっかりやっている。その上で県として県民生活をどう考えるか、という視点がある。兵庫県とか、県民局単位とか、行政区でそういうことが生まれるわけだが、そうじゃない県民生活の話も多いような気がする。そういったことを取り扱うのが、地域ごとの課題ということを言われていたが、どうカスタマイズするかという話に繋がっていくのかもしれない。

【地域外人材による地域社会への参画とコーディネーターの重要性】

- ・ 私は外国人支援をしているが、全市町に日本語教室があるのは、全国で兵庫県だけ。ただ、従来は街の中心部で日本教室をしていたのが、交通の不便な地域にも外国人が増加し、学びたくても学べないという環境になっている。また、外国人たちは地域の人と交流がしたいという希望もあるため、既存の公民館を活用するなど、地元と密着した日本語教室の展開がこれから非常に重要。
- ・ 外国人たちは、自ら率先して地域交流に参加してくれる。実際、丹波篠山市では防災訓練に参加し、お年寄りができないバケツリレーに実習生たちが一生懸命取り組み、場が盛り上がるようなことも起きている。そういう部分がギャップであり、そこを埋めるのが、誰かが埋めないといけない。そういう現状を把握しているコーディネーター人材の存在が非常に重要、コーディネーターがいるかないかでその地域がすごく変わると思う。
- ・ 今までと大きく変わってきているのは、新しいコミュニティとして、県外からどころか、国外からもそういった新しいコミュニティが増えてきているということ。このイメージ図の従前と現在が、各主体の3つは変わってないが、そこそ新しい方をどう繋ぐのか、もしかしたら新しい人によって、行政とかNPOとか自治会がまた強化・変化する可能性もあるのではないかな。

【若者に住み続けてもらうための取組の必要性】

- ・ 「住み続けたい街ランキング」を見ると、今、兵庫県に住んでいる人はこのまま住み続けたいと思っているようだ。ある程度、現状に満足しているということ

で、民間や行政がこれまで進めてきた様々な取組は評価に値すると思われる。一方で、20代の人たちがどんどん県外に出ていってしまうのは、兵庫県においても「躍動」できないと思っているからではないだろうか。この点については、年齢が若い段階から若い人たちを巻き込むような施策をもっと打ち出すなど、もう少し努力をしていく必要があると思う。

また、先ほど、「助けてと言えない」という話があったが、社会に埋もれた SOS をすくい上げていくためには、様々な支援活動していらっしゃる方々の声を行政が聞いていく仕組みが必要だと思う。ただ、きちんとした仕組みをつくろうとすると時間がかかりがちだ。即座に対応するフットワークの軽さというものが基礎自治体にも県にも必要だと思う。

【参画と協働の推進に関する条例の見直しの必要性】

- ・ この参画協働条例ができて、そろそろ20年という節目を迎える。ちょうど震災から30年というのものもあるが、これをそもそも見直す必要があると考えている。当時の社会情勢や市民のあり方は今となってはかなり変わってきている。先ほどから出ている話はまさにそういったことが現れている気もする。このイメージ図を基になぜ今日のような議論が広がったかということ、やはり行政が考えているのとは、違ってきている現状があるということ。これはまさに知事が言われている現場主義でいかなないとわからないことなのかなと改めて感じた。
- ・ 参画協働条例が施行された際にも、間接民主主義との関係はどうなるんだという議論があり、県議会が大反対をした経緯がある。当時も、民主主義とは何かというような、かなり大きな前提のようなものを議論していた。当時の貝原知事は直接民主主義的な考え方、いわゆる地域に関わる人たちを準公務員的に扱うんだみたいな考え方もあるって、かなり公の権限というものを強く捉えておられた印象がある。
- ・ 私は今回、本審議会のことで、事務局と事前に話をする中で、条例の見直しが必要なのではという話をさせてもらった。そういった話を提起するのは本来であれば県議会かもしれないが、どこかで誰かが提起しない限りは、このままいってしまう。今一度巻き直しが必要なんじゃないかと思っている。
- ・ 最初に年次報告でもあったが、もちろん県は広域自治体だからいろいろやっているし、しかも各課に及ぶところを、この観点で整理したらこういう報告になるというのは分かるが、もう1回巻き直しがあるんじゃないかなというのを今日改めて感じた。
- ・ 今日議論を聞いていて、委員の皆さんがやってらっしゃることはすごいなと思ったし、例えばさっき言われていた「一番大事な視点は『課題解決』じゃない」という話も、実は1990年代からまちづくりの分野では言われてきたところ。まさに冒頭に話のあったCan、自分に何ができるのかという「地域資源型」という方法だが、そういったまちづくりの議論もあるので、そういう意味では今日の議論というのはまさに、最先端だったと思う。
- ・ なぜ民主主義の話をしたかということ、今、民主主義の危機にあると思っている。

ロシア・アメリカといった諸外国含めて、議会制民主主義も色々と問題になっている。そうなったとき、誰がその暴走を防ぐのかというとやはり市民。

- 本審議会には、消費生活部会もあり、全体会の冒頭に副会長が言われたように、消費者市民社会という言葉が消費者教育法にはあり、まさにそういった「消費者市民」という概念を考えると、今後、市民社会をどういうふうに作っていくのか、民主主義とどう関わっていくのかという部分を議論していかないといけないと思う。

【今後の議論に向けて】

- 整理の仕方としては、Will、Can、Must という整理が非常にわかりやすい。また、ギャップを埋めるというのはなかなか考え方が難しいし、躍動するっていうことを実現しようと思うならば、資源型で考えていくことも大事。
- そういった話を総括する中で、今の民主主義がどうなっているのか、そして、その民主主義における市民はどのような姿なのかを考えることが、テーマとしては大きくなりすぎるかもしれないが、そういうことをバックボーンに持たないと議論がまとまりにくいと考える。